

# 山形県三川町における格助詞「サ」について

山本 友美

## 1. はじめに

「東京サ行く」などの用法の「サ」は、東北地方全域でみられる東北方言の格助詞の代表的なものである。共通語の「エ（へ）」や「ニ」に対応し、地方によって多少用法が異なっている部分があることが先行研究から明らかになっている。

今回、これまでの研究資料をふまえ、山形県東田川郡三川町で格助詞「サ」の用法について調査を行った。本稿では、三川町における「サ」の用法の広がりについて、調査の結果を報告し、考察を加える。

## 2. 先行研究

「サ」のついでの研究は多数あるが、移動性や方向性の明確な用法ほど使われやすい傾向があること、用法について地域差があることは共通していえるようだ。

三川町に隣接する鶴岡市の最近の「サ」の用法を記述したのものとして佐藤（1994）があげられる。佐藤（1994）では、話者1名を対象に記述しており、標準語の「ニ」との対応について詳しい。また、佐藤（1995）では佐藤（1994）を参考に、標準語の「ニ」にあたる助詞の用法について、年齢差の予想される項目を中心に三川町の若年層（20・30歳代）、中年層（40・50歳代）、高年層（60歳以上）に調査を行っている。「静かになる」に関して「ニ」→「無助詞」の変化が認められることや、「行為の目的（名詞に接続する場合）」、「迷惑の受身」の用法について「無助詞」→「サ」への変化が見られることなどを指摘している。

「サ」の用法について歴史的な側面から考察を加えたものに小林（1995）がある。小林（1995）では、先行研究の記述を利用して東北全般の用法を分析し、次のようにまとめている。

- (i) ある対象に向けての生物や事物・観念の移動が行なわれる場合、その対象をサで表示することができる。また、実際の移動を伴わなくとも、論理的な前提として移動が想定可能であれば、その対象にサを使用することができる。
- (i) ただし、具体的なものより抽象的な観念の移動の方が、また、実際の移動より論理的な前提として想定される移動の方が、サを使いにくい傾向

がある。

さらに、「移動の目的」、「使役の相手」、「原因・理由」、「変化の結果」、「時」、「強調」、「添加」、「並列」など地域差のみられる用法をあげ、次のように付け加えている。

(ii) 移動を伴わなくとも、ある対象に向けての方向性が認められるならば、その対象をサで表示することができる。

(ii) ただし、この用法でのサの使用は、なんらかの移動を伴う場合に比較して不安定なものである。

これに加えて、話し手ないし主語への方向性の感じられる「受身の相手」の用法や方向性ということでは説明できないような「ヲ」格にあたる用法は不安定であるとしている。また、小林（1995）では、用法の地域差の成立を地理的分布や使用者の年層、文献などをもとに分析し、「サ」の用法の発達の過程を示している。

日高（1999）では、青森、秋田、岩手、福島の内出身の高校生や大学生といった若い世代を対象とし、標準語の「二」の用法に対応させた調査文 50 項目についてアンケート調査を行っている。「サ」の用法について若年層においては標準語の「二」の用法の範囲で「方向性」、「移動性」、「場所性」などの意味から広がりつつあることなどを指摘している。また、地域差の見られる用法としては「移動の目的」、「存在場所」、「所有の主」、「変化の結果」、「名目」、「比況」、「感情の誘因」、「時」、「副詞の一部」などをあげている。

統一的な企画で行われた「サ」の調査には『方言文法全国地図』（GAJ）や鎌田（1966）などがあげられるが、設定された項目が網羅的とはいえないため、主要な用法の分布をみるにとどまる。

### 3. 調査概要

三川町在住の若年層（20～34 歳）6 人、中年層（35～60 歳）10 人、高年層（61 歳以上）10 人の計 26 人<sup>1</sup>に面接調査を行った。

調査の文例は、日高（1999）のアンケート調査の「サ」を用いた文を元に、予備調査<sup>2</sup>を踏まえて検討し、変更を加えたものを使用した。調査者が読みあげた文例について、インフォーマントには調査者が提示した「1 使う」、「2 使わないが、三川町のことばとして自然である」、「3 使わないし、三川町のことばとしても不自然である」という選択肢からひとつを選ぶよう指示した。インフォーマントが文例の意味を理解しづらいときは、標準語で意味を説明し、理解を促した。「2 使わないが、三川町のことばとして自然である」もしくは「3 使わないし、三川町のことばとしても不自然で

ある」と答えたインフォーマントに対しては、さらに標準語で文例の意味を示し、どのように言うか回答を求めた。表1に文例を示す。なお、文例の左列の用法のラベルは日高（1999）による。

表1 「サ」の文例（文例は標準語の「ニ」の用法に対応している。）

移動の方向	101「東の方サ行く」
移動の着点	102「東京駅サ着く」
相手（着点）	103「太郎サ話しかける」
	104「太郎サ本をやる」
	105「太郎サ電話する」
	106「太郎サ感謝する」
	107「将棋で太郎サ勝つ」
	108「太郎サ会う」
	109「生徒サ本を読ませる」
比較・対照の相手	110「この服は私サダバ合わない」 「この服は私サワ合わない」
	111「犬サ似ている」
	112「このお茶はからだサいい」
移動の目的	113「野球を見サ行く」
	114「仕事サ行く」
存在場所	115「今日は一日中家サいる」
	116「机の上サ本がある」
	117「駅前サ公民館がある」
所有の主	118「私サワ弟がいる」
	119「私サ買えるような値段ではない」
	120「私サダバ彼の態度が不満だ」 「私サワ彼の態度が不満だ」
	121「今日は雪サなった」
変化の結果	122「午後から雨が雪サなった」
	123「午後から雨が雪サ変わった」
	124「小学校の先生サなった」
	125「息子の太郎サ本をもらった」
相手（起点）	126「隣の家の息子サ手伝いに来てもらった」
	127「犬サ追いかけられる」
	128「娘を嫁サやる」
役割	130「おまえの娘を手伝いサよこせ」
	129「俺の代わりサ行ってくれ」
副詞の一部	141「あお向けサ倒れる」
名目	131「お礼サお金をもらった」
比況	132「車がおもちゃサ見える」
感情の誘因	133「今年の暑さサワまいった」

時	134 「5 時サ起きる」
	135 「6 時サ目覚し時計をかける」
割合	136 「3 日サ 1 度は納豆を食べる」
強調	137 「ひた走りサ走った」
列挙	138 「海サ山サ最適なシーズンがきた」
	139 「遊びサ仕事サ大忙しだ」
	140 「兄弟は姉ひとりサ妹ひとりだ」
ヲ格の意味領域	142 「太郎が次郎サなぐった」
	143 「鳥サ追いかけた」
	144 「ここサ掘ってみろ」

文例は番号順に調査した。番号に下線のついたものは筆者が加えた文例である。

文例 110 と 120 について三川町では提題助詞は「ダバ」と「ワ」が両方用いられるため 2 つの用例を設定したが、回答に差はみられなかった。しかし、118 「私サワ弟がいる」の「サワ」については数人のインフォーマントから「人と比べるときに使う」というコメントがあり、「私サ弟がいる」となら言うとの回答があった。

「時」と「ヲ格の意味領域」に関しては表 2 の文例に従って追加調査<sup>3</sup>を行った。「時」の用法で「サ」の使用を確認する必要がある、また「ヲ格の意味領域」の用法では、「追いかけた」を意味する「ぼっかけた」という動詞があるが、「ぼっかけた」のほうが「サ」が使いやすいのではないかと考えたためである。文例の「サ」の部分に予想される助詞を、各文例ごとに {デ・サ・なにもつけない・その他 ( )} のように示し、もっとも自然なものを選ぶよう指示した。

表 2 追加調査の文例

201 「6 時サ起きる」	208 「6 時半サ着いた」
202 「6 時サ目覚し時計をかける」	209 「会議は 6 月 25 日サあるそうだ」
203 「6 時サ駅で会う」	210 「夜中サ火事になった」
204 「30 分後サ会おう」	211 「12 時サなった」
205 「会議は 6 時サ終わる」	212 「鳥サぼっかけた」
206 「6 時サ来てくれ」	213 「鳥サ追いかけた」
207 「6 時までサ来てくれ」	

#### 4. 調査結果と考察

どの年層も安定して「使う」という回答が多かったものは文例 101～106、108～119、123、125、128、133、135、140 であった。107、126、129、136 は、どの年層もさほど「使う」という回答が多くなかった。年層間で回答に差の見られた文例は 120、

122、124、130、131、132、138、139、141、143 だった。「使う」という回答がどの年層もほとんどみられなかった文例は 121、127、134、137、142、144 であった。安定して使われる用法や年層差の見られる項目を中心に、各用法について、先行研究と対照しつつ考察する。

#### 4. 1 どの年層にも安定して使われる用法

「移動の方向」、「移動の着点」、「相手(着点)」、「比較対照の相手」、「移動の目的」、「役割」、「存在場所」、「所有の主」、「感情の誘因」などの用法についてみていく。

GAJ 第 19 図「東の方へ行け」をみると、東北地方のほぼ全域に「サ」が分布している。この「移動の方向」の用法が東北方言の「サ」の本来の用法であることは先行研究からも明らかである(佐藤 1961、小林 1995)。今回の調査でも、101「東の方サ行く」(移動の方向)ではすべてのインフォーマントが使うと答えている。「移動の方向」からまず用法が広がったといわれる「移動の着点」の 102「東京駅サ着く」も、25 人中 23 人のインフォーマントが使うと答えている。

また、実際の移動はないが、着点的な相手を表す文例で使うと答えた人数は、103「太郎サ話しかける」24 人、104「太郎サ本をやる」25 人、105「太郎サ電話する」25 人、106「太郎サ感謝する」24 人、108「太郎サ会う」23 人、109「生徒サ本を読ませる」24 人と、年層の差なく、ほぼすべてのインフォーマントが使うと答えた。

「相手(着点)」の用法の中で 107「将棋で太郎サ勝つ」だけは図 1(本稿末尾に示す)のように他の項目と異なる回答結果となった。

比較・対照の相手を表す用法では、110「この服は私サダバ合わない」、「この服は私サワ合わない」はどちらも全 25 人中 23 人が使うと答え、111「犬サ似ている」、112「このお茶はからだサいい」では全員というように、「移動の方向」や「移動の着点」などと同じように使うと答えた人が多かった。また前述の通り、110 では「サダバ」と「サワ」の間に特に違いは見られなかった。

113「野球を見サ行く」、114「仕事サ行く」は、それぞれ「移動の目的」の動詞接続と名詞接続の場合であるが、この 2 つも三川町では使うと答えた人が多い(113、114 とともに 25 人中 24 人)。鶴岡では名詞に接続する場合は無助詞のことが多いが、「サ」を用いることもあるという(佐藤 1994)。今回の調査では「サ」を使うかどうか質問したので、ほかの助詞や無助詞の場合と「サ」を比べてどちらが自然かは分からない。しかし、佐藤(1995)の三川町の調査では文全体を回答してもらうという方法で行われている。その結果、「仕事に行った。」の項目は高年層 84%(32 人中 27 人)、

中年層 70% (10人中7人)、若年層 100% (21人中21人) が下線部に対応する助詞として「サ」を答えていることから、「サ」が自然な用法であるといえるだろう。

佐藤 (1995) では、「旅行に行った。」の項目で同じ名詞接続でも異なる結果を示したことから、「仕事」は「旅行」と同様に漢語サ変動詞を作りうるが、「仕事しに行く」とは言っても「旅行しに行く」とは言えない (言いにくい) 点」が関係しているのではないかと指摘している。こうした名詞の性質の違いが助詞に影響することが考えられるが、今後の課題としたい。

次に、「役割」の用法についてみていく。佐藤 (1994) の鶴岡調査によると、「東京に嫁にやる」という意味のことをいうときは「トーキョーサ ヨメ\_ケル」と無助詞になるのが自然であり、「東京サ嫁サケル」とは言えないようだ。佐藤 (1995) の三川町の調査では、「東京に嫁にやる」という項目で下線部を無助詞で答えた人が多く、「サ」と答えたのはわずかであった。ところが、今回の三川町の 128「娘を嫁サやる」の結果は 25人中23人が「サ」を用いることができると答えている。他の文例を調査する必要はあるが、佐藤 (1995) と今回の調査を比べると、「東京サ嫁サやる」と「サ」が連続すると後部の「サ」が使いにくくなるのではないだろうか。日高 (1999) ではこの「役割」の用法を「移動の目的」と連続するものととらえている。また、佐藤 (1994) でも「仕事サ行グ」のような「行為の目的を表す場合 (名詞に接続する場合)」と同じ用法として扱っている。今回の結果では、確かに 128 は 114「仕事サ行ク」に匹敵する人数が使用すると答えており、近い用法であると思われる。

存在の場所を表す用法については、小林 (1995) では、福島県小高町の調査で「それ自体が移動能力をもつ人間や、それ自体は移動能力をもたなくとも容易に移動させることが可能な事物の場合」には「サ」が使われるが、「固定されていて、移動が難しい事物の場合」には「ニ」が使われると指摘している。また、日高 (1999) でも、岩手、福島では存在物が移動不可能であると「サ」の使用率は落ちるという結果がある。しかし、三川町では 115、116、117 どの文例も、どの年層も使うと答えた人が多い (115、116 は 25人全員、117 は 25人中24人)。存在物が移動可能か不可能かによって使用が制限されることはないようだ。

所有の主を表す用法も使うと答えた人は多く、118「私サワ弟がいる」は 25人中21人、119「私サ買えるような値段ではない」は 25人中23人であった。120「私サダバ彼の態度が不満だ」、「私サワ彼の態度が不満だ」でも若年層と高年層は図 2 のように使うと答えた人が多かったが、中年層は 10人中4人ととどまった。中年層で「サダバ、サワ」を使うと答えなかった 6人のうち4人は「ダバ」を使うと答えた。数人

のインフォーマントは「彼の態度が不満だ」という言い方に違和感があることから、不満を所有している主を「サダバ、サワ」で表せないというよりは、三川町のことばとして不自然な表現だったのではないだろうか。

「感情の誘因」の用法の133「今年の暑さサワまいった」は、若年層5人、中年層8人、高年層6人が使うと答えた。小林(1995)は「暑ササマイル」という例文を「原因・理由」の用法と位置づけ、「サで表示される対象から主語への方向性も感じられる点で「受身の相手」の用法に近い」としている。

#### 4. 2 年層差のみられる用法

「比況」、「役割」、「名目」、「変化の結果」、「副詞の一部」、「ヲ格の意味領域」などの用法で年層差がみられた。

「比況」の用法は、日高(1999)では、「比較・対照の相手」に意味的に連続する用法だとされている。132「車がおもちゃサ見える」の項目では、若・中年層ではほぼすべての人が使うと答えたが、高年層で使うと答えたのは9人中4人とどまり、使用には世代差がみられるようだ。

130「おまえの娘を手伝いサよこせ」は128「娘を嫁サやる」と比べると話し手の視点が違うが、「役割」の用法と考えられる。回答は高年層で使うと答えた人が9人中5人であったが、中・若年層のほとんどは使うと答えた。

「名目」は、日高(1999)によると、「役割」に意味的に連続する用法だとされている。日高(1999)の調査では、「役割」の用法に比べるとどの地域も使用率が低く、その要因としては「役割」には「移動性」があり、「名目」には「移動性」がないことが指摘されている。今回の調査の131「お礼サお金をもらった」では、高年層6人、中年層4人、若年層1人が使うと答え、年層が下がるにしたがって使うと答えた人数は減る。「サ」ではなく「ニ」を使うと答えた人が多い中で、「デ」を使うと答えた人が中年層に2人、若年層に1人みられる。標準語の格助詞「デ」のもつ「原因」や「理由」の意味が拡張したものだろうか。佐藤(1995)の三川町の調査において、「デ」は主に「時」の用法でみられるが、「ほんとにに困った。」の項目でも若年層の22人中8人が「デ」と回答している。佐藤(1995)は、助詞「デ」の用法が拡大しているかは今後の検討が必要であるとしている。

121「今日は雪サなった」、122「午後から雨が雪サなった」、123「午後から雨が雪サ変わった」は、121→122→123の順に変化が明確になるように設定した項目である。図3は若年層、中年層、高年層で「1 使う」と答えた人数を項目ごとに示したもので

あるが、回答結果をみると 121→122→123 の順にどの年層も「1 使う」と答えた人数が増えており、123 ではすべてのインフォーマントが「1 使う」と答えている。日高（1999）では、

東北方言の助詞「サ」の最も中核的な意味は、「移動の方向・着点」という「着点的方向性」を表すことであるということを考え合わせれば、変化の「前→後」という方向性が明確なものは「サ」で表しやすく、そういった変化の「前→後」が想定しにくいものでは、「サ」が用いにくいと言えよう。

と指摘しているが、三川町にも同じような傾向があるといえるだろう。

「変化の結果」を表す助詞についての調査は GAJ 第 23 図「大工になった」がある。東北地方では「ニ」を用いるか無助詞の地域がほとんどであり、庄内地方も無助詞の地域という結果が示されている。佐藤（1994）の鶴岡調査でも無助詞の例が現れている。ここで三川町の 124「学校の先生サなった」の回答（図 4）をみると、「1 使う」と答えているのは高年層では 9 人中 3 人であるのに対して、中年層では 10 人中 7 人が、若年層では全員が「1 使う」と答えている。図 3 の 122「午後から雨が雪サ変わった」で高・中年層に比べて若年層 6 人中 5 人とほとんどが「1 使う」と答えていることから、「サ」の変化の結果の用法は高年層から若年層へ徐々に広がっているといえるだろう。

「副詞の一部」の用法の 141「あお向けサ倒れる」（図 5）では、高年層はほとんどが「3 使わないし、三川町のことばとして不自然である」と答えているのに対して、中年層のほとんどと若年層全員が「1 使う」と答えている。「1 使う」と答えていないインフォーマントがどのような助詞を用いると答えたか見てみると、中年層の 2 人は「ニ」、高年層 6 人が「ニ」で、「ナッテ」、「デ」が各 1 人となっている。

「ヲ格の意味領域」のうち 142「太郎が次郎サなぐった」では、高年層は 9 人全員が「使わないし、三川町のことばとしても不自然である」と答えた。若・中年層あわせても使うと答えた人数は 3 人であった。

143「鳥サ追いかけた」では、高年層 9 人中 8 人が使うという結果が目を見く。中年層では 10 人中 4 人が使うと答えたが、若年層では 0 人であった。「ヲ格の意味領域」での「サ」の使用については、鎌田（1966）でも報告されている。小林（1995）では、「サ」の「移動の目標」の用法から、ヲ格の「対象に向かった移動動作」の用法にも「サ」が使われるようになったのではないかと指摘している。この用法は非常に不安定であるとも言われている。また追加調査の結果、「追いかけた」と「ぼっかけた」に対し、ともに全ての年層で助詞「ドゴ」を使用することが自然であると回答した。

#### 4. 3 「サ」があまり使われない用法

「副詞の一部」、「相手（起点）」、「時」などの用法についてみていく。

「副詞の一部」の用法の 129「俺の代わりサ行ってくれ」で使うと回答した人数は若年層 1 人、中年層 3 人、高年層 3 人である（図 6）。使うと答えなかった 18 人のうち、10 人が無助詞、5 人が「ニ」、3 人が無助詞もしくは「ニ」を用いると答えた。佐藤（1994）の鶴岡調査でも同じ文で無助詞表現となっている。

「副詞の一部」の項目でも、129 は「名目」の用法に近く、141 は「変化の結果」に近い用法であるように思われる。他の副詞についても調べてみる必要があるだろう。

GAJ によると、庄内地方は第 27 図「犬に追いかけられた」では「カラ」を用いる地域となっている。今回の調査では、127「犬サ追いかけられた」の文例で「2 使わないが三川町のことばとして自然である」もしくは「3 使わないし三川町のことばとしても不自然である」と答えたのは 25 人中 21 人だった（図 7）。そしてその 21 人全員が「カラ」を使うと答え、受身文の動作主を表す場合は「カラ」が用いられていることがわかる。日高（1999）によると、受身文の動作主を表す場合に若年層で「サ」の使用が見られるという報告<sup>5</sup>があるが、今回の 126「隣の家の息子サ手伝いに来てもらった」の回答（図 8）を見ると、25 人中 11 人が「サ」を使うと答えた。「サ」を使わないと答えた 14 人のうち 13 人は「カラ」を使うと答えている。「サ」と「カラ」が均衡しているように見えるが、ここで GAJ 第 26 図「息子に手伝いに来てもらった」をみると庄内地方は「サ」を用いる地域となっている。三川町で受身文の動作主を表すのに用いられていた「カラ」の用法が広がり、「テモラウ」文の動作主も「カラ」が用いられるようになったと考えられるのではないだろうか。

125「息子の太郎サ本をもらった」については使うという回答が 25 人中 23 人であった。「太郎→自分」という起点の用法ではなく、「他の人→太郎」という着点（本稿 4.1）の意味で取ったためではないかと考えられる。

「時」の用法の 134「5 時サ起きる」は、ほとんどの回答が「使わないし、三川町のことばとして不自然である」であり、使われるのは「ニ」や「デ」といった助詞だった。一方、135「6 時サ目覚し時計をかける」では、25 人中 22 人が使うと答えている。佐藤（1994）では「アシタ ロクジサ メザマシ カゲトイデクレ。（明日 6 時に目覚し時計をかけておいてくれ）」という文例を挙げ、「一種の場所（時計の針を止める場所）もしくは到達点（時計の針の到達する点）的な用法か。」と考察している。

追加調査の結果、回答に「サ」が現れたのは 202「6 時サ目覚し時計をかける」と 207「6 時までサ来てくれ」、211「12 時サなった」の 3 項目であった。202 では若年

層 2 人、中年層 3 人、高年層 1 人が、207 は中年層が 1 人、211 では若年層 2 人、中年層 1 人が「サ」を答えている。追加調査で「サ」が使えるという結果になったのは、佐藤（1994）が指摘している、場所、もしくは到達点的な用法と考えられる文例であった。211 で「サ」が使えるのは、「変化の結果」の用法と連続性があるためではないだろうか。本調査の 135 と追加調査の 202 が同じ文例にもかかわらず 202 で「サ」を使うと回答した人数は 15 人中 6 人とどまった。135 は「サ」が使えるか質問したもので、202 は自然な助詞はどれかを質問したものであるからだろう。

#### 4. 4 その他

日高（1999）では、どの地域も「割合」、「強調」、「列挙」の用法で「サ」はほとんど使われないようだ。

136 「3 日サ 1 度は納豆を食べる」（割合）で使うと答えた人は若年層では 4 人、中年層は 6 人、高年層は 4 人であった。使わない人は全員が「ニ」を使うと答えた。

137 「ひた走りサ走った」（強調）では使うと答える人は 1 人もいなかった。日常で「ひた走りに」という表現は使わないというコメントがあり、「ランキナッテ 走った」といういい方をするようである。

図 9（138 「海サ山サ最適なシーズンがきた」）、図 10（139 「遊びサ仕事サ大忙しだ」）、図 11（140 「兄弟は姉ひとりサ妹ひとりだ」）などの「列挙」の項目をみると、高年層はどの項目も大きな違いはない。しかし、中・若年層は、図 11 が全員使うと答えている。これは、138・139 が 140 と意味的に異なるわけではなく、138・139 の表現自体、日常的に使われないためと思われる。以上のような年層差・個人差があるとは言え、これらの文で「サ」を用いる人がいるのは、「サ」が標準語の「ニ」の用法に広がりつつあることを示すと思われる。

「ヲ格の意味領域」の用法 144 「ここサ掘ってみろ」でも若年層で使うという人はおらず、高年層、中年層は各年層 3 人ずつ「サ」を使うと答えた人がいた。これは日高（1999）でも言われているように、「ここに（向かって）掘ってみろ」の意味で取りやすいためだろう。

#### 5. まとめ

今回、三川町での格助詞「サ」についての調査でわかったことをまとめる。

- ・「移動の方向」、「移動の着点」、「移動の目的」といった実際の移動を伴う用法や「相手（着点）」の用法はどの年層でも安定して使われている。しかし、「相手（着点）」

- の用法で「将棋で太郎サ勝つ」では「カラ」を使うという人もいた。
- ・「移動の目的」に意味的に近い、「役割」の用法も安定して使われているが、移動性のない「名目」は、年層が下がるにしたがって使う人は減っている。
  - ・「比較・対象の相手」の用法もどの年層も安定して使われている。この用法に近い「比況」の用法では、高年層より、若・中年層が使用する傾向がある。
  - ・存在物が移動可能か不可能かによって「サ」の使用が制限されることはない。
  - ・「所有の主」を表す用法も安定して使われている。
  - ・対象への方向性のみられる「感情の誘因」を表す場合は「サ」が主に使われる。
  - ・「変化の結果」の用法は、変化の意味が明確なほど「サ」が用いられやすく、高年層から若年層へ徐々に広がっている。
  - ・「副詞の一部」の用法では、それぞれの副詞の意味によって使用に年層差がみられた。
  - ・「相手（起点）」の用法で、受身文の動作主を表す場合は「カラ」が用いられる。この「カラ」の用法が広がり、「テモラウ」文の動作主も「カラ」が用いられるようになりつつある。
  - ・「時」の用法で「サ」用いられるのは「6時サ目覚し時計をかける」などの場所か到達点的な場合と、「12時サなった」などの「変化の結果」と考えられる場合にとどまる。
  - ・「サ」の用法は標準語の「ニ」の用法に広がりつつあり、「割合」や「列挙」にも広がっている。
  - ・「ヲ格の意味領域」では、「鳥サ追いかけた」という対象に向かう動作が含まれる場合に高年層でほとんどの人が「サ」が使えるが、年層が下がるにしたがって「サ」が使えなくなる。

## 注

1. 高年層 10 人のうち 1 名が文例すべてに「1 使う」と回答しており、設問の意図を理解していたとは言いがたいため、集計から除外した。
2. 予備調査は 2002 年 7 月 18 日～19 日の 2 日間、三川町出身の佐藤武夫氏に東京女子大学にて行った。
3. 追加調査は 2003 年 1 月下旬、三川町の若・中・高年層各 5 人ずつを対象とした。調査は三川町役場企画課の鈴木氏にお願いした。
4. 使わないと答えた 16 人中 11 人は、「将棋で太郎に勝つ」の下線部に対応する助詞として「カラ」を挙げている。三川町に接する鶴岡市での調査（佐藤 1994）では

「カラ」が現れるのは共通語の「ニ」に対応して、「動作・作用を受ける場合の動作の主または動作の出所を表す場合」とある。しかし、「将棋で太郎カラ勝つ」の「カラ」は「動作・作用を受ける場合の動作の主」ではないし、「動作の出所を表す場合」とも異なるようである。「将棋で太郎カラ勝つ」といえるのはなぜだろうか。「将棋で太郎カラ負ける」など他の文例は調査していないため正確にはいえないが、「太郎から勝負の白星を勝ち取る」というようなニュアンスがあるのではないだろうか。

5. 日高（1999）は、「受動文の動作主、および「（～テ）モラウ」の相手という「動作の起点」となる格は、「移動先に向かう方向性」も「場所性」も持たず、『方言文法全国地図』の調査でも（第 27 図「犬に追いかけられた」、第 26 図「息子に手伝いに来てもらった」）、「サ」の使用はほとんど見られない。一方で、今回の若年層の調査では、いずれの地域でも、ある程度の使用率が見られる。若年層で用法が広がってきているものと言える。」と報告している。

#### 参考文献

- 鎌田良二（1966）「東北方言における格助詞「サ」について」『甲南女子大学研究紀要』  
2
- 国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図』第 1 集 大蔵省印刷局
- 小林隆（1995）「東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44
- 小林隆（1997）「周圏分布の東西差—方向を表す「サ」の類について—」『国語学』188
- 小林隆（2002）「格助詞」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』
- 佐藤喜代治（1961）「東北方言における格助詞「サ」の用法」『国語学研究』1
- 佐藤亮一（1994）「鶴岡方言における助詞「サ」の用法—共通語との対応を中心に—」  
国立国語研究所編『鶴岡方言の記述的研究—第 3 次鶴岡調査報告 1—』秀英出版
- 佐藤亮一（1995）「山形県庄内地方における共通語の「に」にあたる助詞の用法—三川町における社会言語学的調査（準備調査）から—」フェリス女学院大学文学部  
日本文学科編『日本文学科創設三十周年記念フェリス女学院大学国文学論叢』
- 日高水穂（1999）「ことばに関するアンケート調査 1997—1998」日高水穂編『秋田大  
ことばの調査』第 1 集

（やまもと ともみ・東京都立大学学生）

〈資料〉

図1 107「将棋で太郎サ勝つ」 (人)

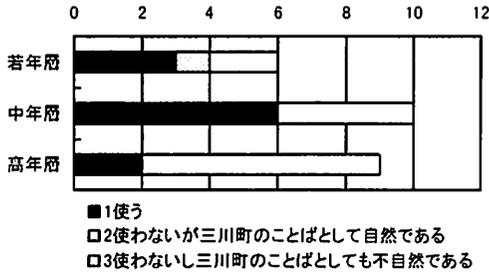


図2 120「私サワ彼の態度が不満だ」 (人)

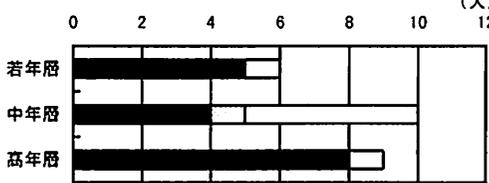


図3 変化の結果の文例121,122,123について「1使う」と答えた人数 (人)

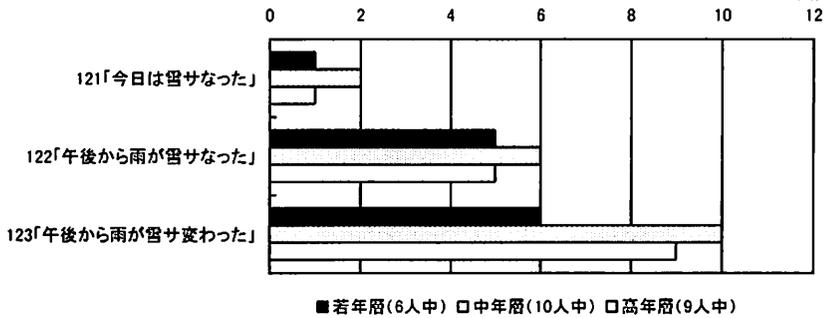


図4 124「学校の先生サなった」 (人)

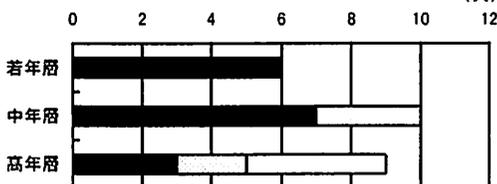


図5 141「おお向けサ倒れる」 (人)



図6 129「俺の代わりサ行ってくれ」 (人)

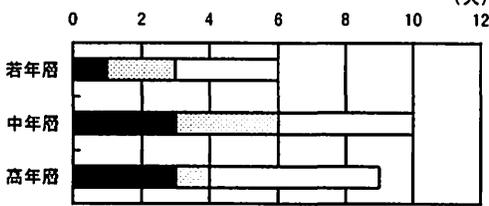


図7 127「犬サ追いかけられた」 (人)

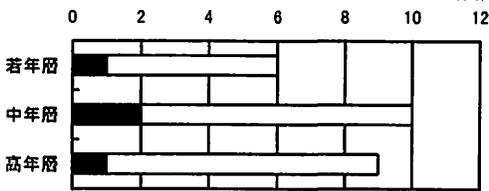


図8 126「隣の家の太郎サ手伝いに来てもらった」

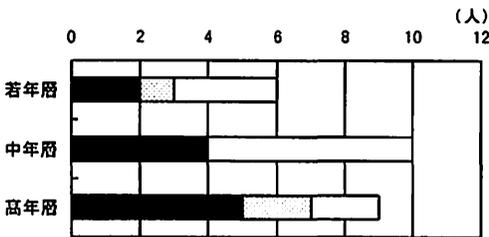


図9 138「海サ山サ最適なシーズンがきた」 (人)



図10 139「遊びサ仕事サ大忙しだ」 (人)

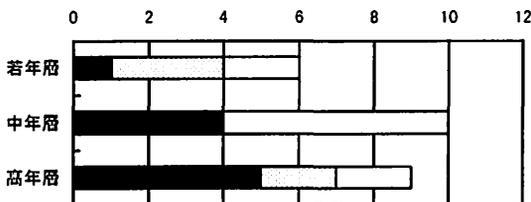


図11 140「兄弟は姉ひとりサ妹ひとりだ」 (人)

